

セレンディピティ

2020. 8. 25

「セレンディピティ」一般には馴染みのない言葉だと思う。日本人のノーベル賞受賞者がテレビの取材などの際に使っている言葉なのだが、一向に広まらない。アメリカ人は、この言葉が好きらしく、街の通りの名にしたり、喫茶店の名にしたりしている。

セレンディピティ (serendipity) とは、素敵な偶然に出会ったり、予想外のものを発見すること。また、何かを探しているときに、探しているものとは別の価値があるものを偶然見つけること。ふとした偶然をきっかけに、幸運をつかみ取ることである。

この言葉は、イギリスの政治家・小説家であるホレス・ウォルポールが生み出した造語である。彼が子どものときに読んだ『セレンディップの三人の王子』という童話にちなんだものである。セレンディップとはセイロン島、現在のスリランカのことである。

『セレンディップの三人の王子』に出てくる三王子はおもしろい才能をもっていた。たえずものを見失う。それをさがすのだが、さがすものは出てこなくて、思いもかけないものが飛び出してくる。それが一度や二度ではなく、何度も何度も起こった、という話である。

戦前の日本人を苦しめた結核は、長く不治の病とされていたが、完治するようになったのはペニシリンのおかげである。そのペニシリンがセレンディピティの産物であることはよく知られている。1928年、イギリスの生物学者アレクサンダー・フレミングがブドウ球菌を培養中、誤って偶然アオカビが混入してしまった。ところが、その周辺でブドウ球菌が消えていたことを見つけ、このアオカビに抗菌作用を示す物質があることを発見し、ペニシリンと命名した。

実験中の失敗が偶然、大発見の引き金になった例は、いくつもある。アルフレッド・ノーベルによるダイナマイトの発明、ヴィルヘルム・レントゲンによるX線の発見、キュリー夫妻によるラジウムの発見、パーシー・スペンサーによる電子レンジの発明、アーサー・フライによる付箋 (ポストイット・メモ) の発明、田中耕一による高分子質量分析法の発見、飯島澄男によるカーボンナノチューブの発見などである。科学者の間では、耳新しいことではない。昔からケガの功名というが、セレンディピティは、失敗、間違いの功名である。

私たちの生活に思いをめぐらせたときに、「セレンディピティ」にあたることはないだろうか。さがし物をしていたところ、思いがけない物が見つかり、うれしく幸せな気持ち、あるいは懐かしい気分を味わったことはないだろうか。

私の場合、さすがに科学者のようなことは起こらないが、授業のことを考えていて、セレンディピティと思われることは何度かあった。それは、いつも真剣に悩んでいたときだった。行き詰まっているときだった。その状況は、レベルの違いを考慮しなければ科学者と似たものように思う。

偶然と言えは偶然なのかもしれないが、私にはどうもそうは思えない。日本語では、「偶察力」と訳される場合もあるが、確固とした訳語は定まっていない。ある精神科医は、「徴候的知」と呼んでいる。なるほど、これらの言葉からは偶然という要素が薄くなっている。フランスのルイ・パスツールは、セレンディピティのポイントとして「構えのある心」を挙げている。わかるような気がする。

これからの生活でも、偶然と思われるような出来事の中にセレンディピティがあるはずである。セレンディピティに出会えるということは、“構え”があり、努力を重ねているということである。したがって、とても喜ばしいことである。この言葉が、日本でも広まっていくことを期待したい。